Śatapatha-Brāhmaṇa 訳註（1. 3. 2-4）

古宇田　亮　修

はじめに

古代インドの宗教思想を研究するに際して，ヴェーダ（Veda-）と呼ばれる一大祭祀文献を措くことは許されない。なかでも白（Śukla-）Yajur-Vedaに属する"Śatapatha-Brāhmaṇa"（以下ŚB.）Mādhyandina伝本は，仏教興起からさほど遠くない時期の北インドもしくは東北インドにおいて成立した祭祀文献であり，当時の伝統的宗教の状況を伺うことのできる貴重な資料である。当文献は14のKāṇḍa「巻」から成るが，その第1 Kāṇḍaは全ての供穀祭（iṣṭi-）の原型（prakṛti-）とされる新月満月祭（darśa-pūrṇamāsa-）を主題とする。

本稿は，以前に発表した拙稿[(1)]に続く部分の翻訳（Kāṇḍa 1. Adhyāya 3. Brāhmaṇa 2-4）ならびに筆者による註を提示し，テクストの理解に裨益することを意図したものである。なお，略号に関しては，拙稿1997，2002に従った。また，本稿を作成するに際し，J. Eggelingによる英訳（Sacred Books of the East, vol. 12）は勿論のこと，辻直四郎博士による部分訳（1. 3. 3. 13-16）[(2)]も参照できたことは幸いであった。さらに，最近，現代インドに伝わる新月満月祭の変異型（vikṛti-）の一種であるPavitreṣṭiの記録（多数の写真を含む）が単行本として出版され（M. Tachikawa, Sh. Bahulkar, M. Kolhatkar：*Indian Fire Ritual*, Delhi, 2001），新月満月祭の理解を深めるにも必携の書として推薦する次第である。

翻　訳

1.3.2.1　実に祈献は人間である。人間がそれを展開するから，祈献は人間なのである。実にこの［祈献］が展開されるとき，［それは］人間の大きさに作られる[3]。それゆえ祈献は人間なのである。

1.3.2.2　まさにこのジュフー杓もウパブリト杓も彼(人間)に属している[4]。ドルヴァー杓はまさに胴体である。ゆえに，実にまさに胴体から全ての（sarva- pl.）体肢が生えている。それゆえ，まさにドルヴァー杓から全（まった）き（sarva- sg.）祈献が生じるのである。

1.3.2.3　スルヴァ杓はまさに気息である。この気息は全ての体肢を巡回している。それゆえ，スルヴァ杓は全ての柄杓を巡回するのである[5]。

1.3.2.4　ジュフー杓は彼にとってまさにあの天界である。次に，ウパブリト杓はこの空界である。ドルヴァー杓はまさにこの［地界／大地］である[6]。ゆえに実にまさにこの［大地］からこれら全ての（pl.）世界が生じる。それゆえまさにドルヴァー杓から全き（sg.）祈献が生じるのである。

1.3.2.5　吹き清めるもの（風）であるこのスルヴァ杓は，これら全ての世界を［通りつつ］吹き清める。それゆえスルヴァ杓は全ての柄杓を巡回するのである。

1.3.2.6　展開されつつあるこの祈献は，神々のために諸季節と諸韻律とによって展開される。焼供なるものは神々のものである。彼は王であるソーマやプローダーシャの各々に呼びかけてとる―『何某のために好ましい汝をとらん！』と[7]。このようにして，そのとき［その焼供は］彼らのものとなる。

1.3.2.7　次にアージヤが［スルヴァ杓によって］とられるとき，それは諸季節ならびに諸韻律のためにとられるのである。彼はその各々に呼びかけることなく，まさにアージヤの姿形としてとる。実に彼はジュフー杓の中に４回とり，ウパブリト杓の中に８回とる。

1.3.2.8　彼が４回ジュフー杓の中に［アージヤを］とるとき，彼は諸季節のためにそれをとる。なぜならば，彼はそれを諸々の前供養（prayājá-）のためにとるから。なぜならば，諸々の前供養は諸季節であるから。彼はその各々に呼びかけることなく，［行作の］近似性を避けるために[8]にまさにアージヤの姿形としてとるのである。『春のために汝を！』『夏のために汝を！』と［唱えながら］とるならば，彼は［行作の］近似を作ることになる。それゆえ彼は呼びかけることなく，まさにアージヤの姿形としてとるのである。

1.3.2.9　次に８回ウパブリト杓の中に［アージヤを］とるとき，彼は諸韻律のためにそれをとる。なぜならば，彼はそれを諸々の後供養（anu-yājá-）のためにとるが，諸々の後供養は諸韻律であるから。彼はその各々に呼びかけることなく，［行作の］近似性を避けるためにまさにアージヤの姿形としてとる。『ガーヤトリーのために汝を！』『トリシュトゥブのために汝を！』と［唱えながら］とるならば，彼は［行作の］近似を作ることになる。それゆえ彼は呼びかけることなく，まさにアージヤの姿形としてとるのである。

1.3.2.10　次に４回ドルヴァー杓の中にとるとき，彼は全き（sg.）祈献のためにとる。彼はその各々に呼びかけることなく，まさにアージヤの姿形としてとるのである。彼はまさに全ての（pl.）神格のために切り分けるのであるから，誰に呼びかける必要があろうか？ それゆえ彼は呼びかけることなく，まさにアージヤの姿形としてとるのである。

1.3.2.11　まさに祈献主こそジュフー杓に従う。彼に対して敵対心を抱く者はウパブリト杓に従う。まさに食べる者がジュフー杓に従い，まさに食べられるものがウパブリト杓に従う。ジュフー杓はまさに食べる者であり，ウパブリト杓はまさに食べらるべき者[9]である。実に彼は［アージヤを］４回ジュフー杓の中にとり，８回ウパブリト杓の中にとる。

1.3.2.12　４回ジュフー杓の中に［アージヤを］とる者は，このようにまさに食べる者を限定してより少なくする。次に８回ウパブリト杓の中に

［アージヤを］とる者は，このようにまさに食べらるべき者を限定せずにより多くにする。なぜならば，食べる者が少なくて食べらるべき者が多いとき，繁栄している[10]から。

1.3.2.13　実に４回ジュフー杓の中にとるとき，より多くのアージヤをとり，８回ウパブリト杓の中にとるとき，より少ないアージヤをとる。

1.3.2.14　４回ジュフー杓の中にとるとき，より多くのアージヤをとる。このように食べる者を限定してより少なくすることで，その［食べる者］に勇力（vīryà-）と強さ（bála-）を与える。次に８回ウパブリト杓の中にとるとき，より少ないアージヤをとる。このように食べらるべき者を限定せずより多くにするとき，その［食べらるべき者］を勇力がなく，強さに乏しいものとする。それゆえに王は無辺大の住所（víś-）を［所有地として］選定[11]しても，まさに一つの宮殿（veśmán-）によって搾取したり，ときにはあたかも愛しているかのように追い求めたりする[12]。他方，そのときジュフー杓の中により多くのアージヤをとるのもこの勇力によるのである。彼はジュフー杓に中にとるものをジュフー杓によって注ぎ込み，ウパブリト杓の中にとるものをジュフー杓によって注ぎ込む。

1.3.2.15　これに関し［以下のように］言う者もいる―「ウパブリト杓によって［供物を］注ぎ込まないとき，どうして［供物を］ウパブリト杓の中にとる必要があろうか？」と。そのときウパブリト杓によって［供物を］注ぎ込むならば，これらの人民はそのとき［王とは］別個のものとなるであろう[13]。食べる者もいなければ，食べらるべき者もいなくなるであろう。ジュフー杓によってそれ（アージヤ）を一つにまとめて注ぎ込むのは，そのことによってこれらのヴァイシヤ（víś-）はクシャトリヤに対し貢ぎ物（balí-）を献げるからである。そのとき，ウパブリト杓の中にとるのは，そのことによってクシャトリヤの意に添う限り[14]家畜はヴァイシヤの所有となるからである。そのときまさにジュフー杓によって一つにまとめて［供物を］注ぎ込むのは，クシャトリヤが欲しがると

き，ヴァイシヤに対し「汝が遠くに蓄えておいたものをもって来い[15]」と言ってそれを搾取したり，ときにはあたかも愛しているかのように追い求めたりする［からである］。他方，この勇力によって［この行作もなされる］。

1.3.2.16　実にこのアージヤは諸韻律のためにとられる。４回ジュフー杓の中にとるとき，彼はガーヤトリー（８音節×３連の韻律）のためにそれをとる。次に８回ウパブリト杓の中にとるとき，彼はトリシュトゥブ（11音節×４連の韻律）とジャガティー（12音節×４連の韻律）のためにそれをとる。次に４回ドゥルヴァー杓の中にとるとき，アヌシュトゥブ（８音節×４連の韻律）のためにそれをとる。実にアヌシュトゥブは音声（vā́c-）であり[16]，実に音声からこの全き［世界］が生じる。それゆえドルヴァー杓から全き祈献が生じる。実にアヌシュトゥブはこの［大地］であり，実にこの［大地］からこの全き［世界］が生じる。それゆえまさにドルヴァー杓から全き祈献が生じるのである。

1.3.2.17　彼はとる―『まさしく汝は神々の好むダーマン（dhā́man-[17]）なり』（VS. 1.31）と［唱えて］。実にアージヤなるものこそ神々の最も好むダーマンである。それゆえ唱える―『まさしく汝は神々の好むダーマンなり』と。［続けて唱える―］『汝は誰一人触りえぬ祈献場なり』と。なぜならば，アージヤは雷であるから。それゆえ彼は唱える―『汝は誰一人触りえぬ祈献場なり』と。

1.3.2.18　彼は１回この祈献文とともにジュフー杓の中にとり，３回黙って［とる］。彼は１回この祈献文とともにウパブリト杓の中にとり，７回黙って［とる］。これに関し［以下のように］言う者もいる―「まさに３回づつ祈献文とともにとるべきである。なぜならば，祈献は３つ一組であるから」と。しかし，今は１回づつしか［とらない］。なぜならば３回とることはすでに完了したから[18]。

1.3.3.1　アドヴァリユは聖水（prókṣaṇī-）を手にとる。彼はまず最初にまさに焚き木に散水する―『汝は巣穴に住む（ākharéṣṭha-[19]）黒羚羊な

り。アグニにとって好ましい汝にわれは散水せん』(VS. 2. 1) と［唱えて］。ゆえに彼はこのようにアグニにとってまさに祭礼に適したものとするのである。

1. 3. 3. 2　次にヴェーディに散水する—『汝はヴェーディなり。敷草にとって好ましい汝にわれは散水せん』(VS. 2. 1) と［唱えて］。ゆえに彼はこのように敷草にとってまさに祭礼に適したものとするのである。

1. 3. 3. 3　次に［アグニードは］彼（アドヴァリユ）に対し敷草を手渡す。［アドヴァリユは］東方に向いてそれを結び目とともに置き，それに散水する—『汝は敷草なり。柄杓にとって好ましい汝にわれは散水せん』(VS. 2. 1) と［唱えて］。このように彼はそれを柄杓にとってまさに祭礼に適したものとするのである。

1. 3. 3. 4　次に，残った聖水を草本の根に注ぐ—『汝はアディティを湿らせるものなり』(VS. 2. 2) と［唱えて］。実にアディティはこの大地である。ゆえに彼はまさにこの［大地］のために，このように草本の根を湿らせるのである。［ゆえに］これらの草本は根を湿らせたものとなる。それゆえ，たとえ［草本の］先端が乾いたとしても根はまさに湿っているのである。

1. 3. 3. 5　次に結び目をほどき，前面でプラスタラ[20]をとる—『汝はヴィシュヌの頂髪（stúpa-[21]）なり』(VS. 2. 2.) と［唱えて］。実にヴィシュヌは祈献であり，この髷（śíkhā-）はまさに彼の頂髪である。このように彼はまさにこの［髷］をこの中に置き，前面でとる。なぜならば，この髷は［頭の］前面にあるから。それゆえ，彼は前面で［プラスタラを］とるのである。

1. 3. 3. 6　次に［敷草の］紐をほどく—「これで，彼（祈献主）の夫人はまさに難なく（prákḷptam[22]）出産するから」と［考えて[23]］。それゆえ［敷草の］紐をほどくのである。彼はそれを右側の「腰」に置く。そのとき，これはまさに彼（祈献主）の腰帯である。なぜならば，この腰帯は外見上まさに右側にあるから。それゆえ右側の「腰」に置くのである。［そ

して］再びそれを［敷草によって］覆い隠す。なぜならば，この腰帯は外見上［上衣によって[24]］覆い隠されているから。それゆえ再び覆い隠すのである。

1.3.3.7　次に敷草を［ヴェーディに］撒く。実にプラスタラはこの弁髪である。さてそれ以外の敷草なるものはこの［祈献］の下方に位置する毛髪であり，まさにそれをこの［祈献］にこのように置くのである。それゆえ，敷草を［ヴェーディに］撒くのである。

1.3.3.8　実にヴェーディは女性である。このように神々および［全てのマントラを］聞き終わり学び終った[25]このブラーフマナたちは彼女を囲んで坐る。このように彼らが彼女を囲んで坐るとき［彼女を］裸にさせないのである。それゆえ，［彼女を］まさに裸にさせないために敷草を［ヴェーディに］撒くのである。

1.3.3.9　実にヴェーディの広さが大地の広さである。ヴェーディは［大地に生える］草本である。ゆえにこのように彼はまさにこの大地に草本を置く。それゆえ，彼は敷草を［ヴェーディに］撒くのである。

1.3.3.10　実にこれに関し「みっちりと撒くべきである」と言う者もいる。「実に［この大地］に最も密生した草本がある場合，それは最も生活しやすい。それゆえ，みっちりと撒くべきである」と［彼らは言う］。ゆえに，実にそれ（敷草を撒く行作）はまさに［敷草を］もって来る者（祈献主）のために［行われるのである］。彼は三重に撒く。なぜならば，祈献は三重であるから。次に，また［ヴェーディから］引き抜いてでも撒くべきである。［なぜならば］『彼らはとぎれることなく敷草を撒く』（VS. 7. 32）と歌聖（ṛṣi-）によって歌い挙げられているから。彼は根を下に向けて撒く。なぜならば，この大地において草本は根を下にして安立するから。それゆえ，彼は根を下に向けて撒くのである。

1.3.3.11　彼は撒く―『羊毛の如くに柔軟にして神々にとって坐り心地の良い汝を撒かん』（VS. 2. 2）と［唱えて］。『羊毛の如くに柔軟な汝を』と唱えるとき，彼は「神々にとって好ましい」ということをこのように

唱えているのである。『神々にとって坐り心地の良い』と唱えるとき，彼は「神々にとって安楽に坐れる」ということをこのように唱えているのである。

1.3.3.12　次に火を整える（kalpayati／準備する）。実に献供火は祈献の頭である。実に頭は前半分である。このように彼はまさに祈献の前半分を整えるのである。その真上にプラスタラを保持しながら彼は整える。実にプラスタラはこの弁髪である。このようにまさにこの［プラスタラ］をその［献供火］に入れる。それゆえ，その真上にプラスタラを保持しながら［火を］整えるのである。

1.3.3.13　次に，囲い木によって取り囲む。彼が囲い木によって取り囲むのは［以下の理由による］。実に太初において神々はホートリ職にアグニを選任した。そのとき［アグニは］言った—「実に私はホートリとなって焼べ物[26]を運ぶなどというこの［役］は務められません。かつてあなたは３人の［アグニ］を選任しましたが，彼らは消え去ってしまいました[27]。今，彼らを私のもとに仕えさせて下さい。そうすれば，私はホートリとなって焼べ物を運ぶなどというこの［役］を務めましょう」と。［神々は言った—］「承知した」と。［そして］彼ら［３人］をその［アグニ］のもとに仕えさせた。彼ら［３人］はこの囲い木である。

1.3.3.14　そして彼（ホートリに選任されたアグニ）は言った—「雷であるヴァシャットという掛け声[28]は彼らを焼いた（prā́vṛṇak[29]）。実に私は雷であるヴァシャットという掛け声を恐れる。雷であるヴァシャットという掛け声が私を焼かないように，まさにこれら［の囲い木］によって私を取り囲んで下さい！　まさにそうするならば，雷であるヴァシャットという掛け声は［私を］焼かないであろう」と。［神々は言った—］「承知した」と。彼をこれら［の囲い木］によって取り囲んだ。ゆえに雷であるヴァシャットという掛け声は［彼を］焼かなかった。ゆえにこれらの［囲い木］によって取り囲むとき，アグニに対しまさに鎧を装着するのである。

1. 3. 3. 15　そして彼ら［３人のアグニ＝囲い木］は言った―「もしもあなた方がわれわれをこのように祈献に結びつけるならば，祈献においてわれわれにも分け前を与えて下さい」と。

1. 3. 3. 16　「承知した」と神々は言った。「囲い木の外に跳ねたものをあなた方に注ぎ込もう。そしてあなた方の真上に注ぎ込むならば，それはあなた方を満足させるであろう。そして火の中に注ぎ込むならば，それはあなた方を満足させるであろう」と［彼は言った］。そして火の中に注ぎ込まれたものは彼らを満足させ，次に彼らの真上に注ぎ込まれたものは彼らを満足させ，次に囲い木の外に跳ねたものを彼らに注ぎ込んだ。それゆえ，そのとき跳ねたものは罪過の如きものとはならない。実にそれらはこの大地の中に入った。実にこのように何が跳ねたとしても，その全て（sg.）は，この［大地］に安立するのである。

1. 3. 3. 17　彼は跳ねたものに触る―『空界の主（bhúvapati-）よ，スヴァーハー！[30]　諸存在の主（bhúvanapati-）よ，スヴァーハー！　生類の主よ（bhūtā́nāṃ páti-），スヴァーハー！』（VS. 2. 2）と［唱えて］。実に「空界の主，諸存在の主，生類の主」というこれらは，彼らアグニの名前である。「ヴァシャット」を伴う（供物の）注ぎ込みと同様に，彼（祈献主）の［注ぎ込み］はこれらのアグニ［という囲い木］において行われるのである。

1. 3. 3. 18　さてこれに関し，ある者はまさに焚き木を囲い木として［祭火を］取り囲む。しかしながら，これに関しそのようにしてはならない。焚き木を［囲い木として］取り囲むのは，それ（囲い木）としては不適切となるから。なぜならば，焚き木はまさに載せられるものとして用いられるから。しかしながら，別に囲い木として持って来られたものは，それ（囲い木）として[31]適切なものとなる。それゆえ彼らはまさに［焚き木とは］別のものを持って来るべきである。

1. 3. 3. 19　実にそれら［の囲い木］はパラーシャ[32]であるべきである。実にパラーシャはブラフマンであり，アグニはブラフマンである。なぜなら

ば，［囲い木であるパラーシャは］アグニであるから。それゆえパラーシャであるべきなのである。

1.3.3.20　もしもパラーシャでできた［囲い木］が得られないときは，ヴィカンカタ[33]でできた［囲い木］を用いるべきである。もしもヴィカンカタでできた［囲い木］も得られないときは，カールシュマリヤ[34]でできた［囲い木］を用いるべきである。もしもカールシュマリヤでできた［囲い木］も得られないときは，ビルヴァ[35]か，もしくはカディラ[36]か，もしくはウドゥンバラ[37]でできた［囲い木］を用いるべきである。それゆえ［囲い木は］これらの樹木で作られるのである。

1.3.4.1　実にそれらはみずみずしいものであるべきである。なぜならば，これはそれらの生命であり，それらはこれによって灼熱力をもつもの（satéjas-[38]）となり，これによって勇力に満ちたもの（vīryàvat-）となるから。

1.3.4.2　彼は最初に真ん中の囲い木を囲み置く—『ガンダルヴァ・ヴィシュヴァーヴァス[39]は汝を，あらゆるものの安全のために囲み置くべし！汝は祈献主の囲い木にして，称揚せられ称揚に値するアグニなり』(VS. 2.3）と［唱えて］。

1.3.4.3　次に南側の［囲い木］を囲み置く—『汝はインドラの腕なり。南側の［囲い木］はあらゆるものの安全のためなり。汝は祈献主の囲い木にして，称揚せられ称揚に値するアグニなり』(VS. 2.3）と。なぜならば，囲い木はアグニであるから。それゆえ唱えるのである—『称揚せられ称揚に値するアグニなり』と。

1.3.4.4　次に北側の［囲い木］を囲み置く—『ミトラ，ヴァルナの両者は汝を堅固な支え（dharmáṇ-）によりて[40]，北側に囲み置くべし，あらゆるものの安全のために。汝は祈献主の囲い木にして，称揚せられ称揚に値するアグニなり』(VS. 2.3）と。なぜならば［囲い木は］アグニであるから。それゆえ唱えるのである—『称揚せられ称揚に値するアグニなり』と。

1.3.4.5　次に焚き木を［献供火に］差し入れる。彼は最初に真ん中の囲い木に触れる。それによって彼は最初にこれら［の囲い木］に点火する。次にそれを祭火に差し入れる。それによって彼は目に見える祭火に点火するのである。[11]

1.3.4.6　彼は［焚き木を献供火に］差し入れる―『賢者（kaví-）よ，饗宴に誘う輝かしい汝に点火せん！アグニよ，祭祀において増大する汝に！』(VS. 2.4) とガーヤトリー［調の讃歌を唱えて］。このように彼はまさにガーヤトリーに点火する。［そして］その点火されたガーヤトリーが他の韻律に点火するのであり，点火された諸韻律が神々に祈献物を運ぶのである。[12]

1.3.4.7　次に第二の焚き木を差し入れるとき，彼はそれによって「春」[13]に点火する。［そして］その点火された「春」が他の諸季節に点火する。［そして］点火された諸季節は生類を生み草本を成熟させる。彼は［第二の焚き木を］差し入れる―『汝は焚き木なり』(VS. 2.5) と［唱えて］。なぜならば，焚き木は「春」であるから。

1.3.4.8　次に［焚き木を］差し入れてから低唱する―『スーリヤは東方においていかなる呪いからも汝を守護すべし！』(VS. 2.5) と。実に囲い木はあらゆる方向を守護するために存在する。そのとき彼はこのようにまさにスーリヤを東方を守護するものとするのである―「東方から魔物である羅刹らが侵撃することのないように」と［願って］。なぜならばスーリヤは魔物である羅刹らの撃退者であるから。

1.3.4.9　次に，後供養においてその第三の焚き木をまさに差し入れようとするとき，彼はその［焚き木］によってまさにブラーフマナに点火するのである。［そして］その点火されたブラーフマナが神々に祈献物を運ぶのである。

1.3.4.10　次に，彼は［敷草を］撒かれたヴェーディに戻って来る。彼は２本の草を手にとって水平におく―『汝らはサヴィトリの両腕なり』(VS. 2.5) と［唱えて］。実にプラスタラはこの弁髪である。そのとき，

彼のもつ２本［の草］をまさに眉毛として水平におく。それゆえこの眉毛は水平なのである。じつにプラスタラはクシャトラであり，その他の敷草はヴィシュである。まさにクシャトラとヴィシュを分けるために（vidhṛtyai）［２本の草をその中間に置く］。それゆえ水平に置くのである。また，それゆえに［その草を］ヴィドリティ（vídhṛti-）と称するのである。

1.3.4.11　そのプラスタラを撒く—『羊毛の如くに柔軟にして坐り心地の良い汝を神々のために撒かん』(VS. 2.5) と［唱えて］。『羊毛の如くに柔軟な汝を』と唱えるときは「好ましい［汝］を神々のために」ということをこのように言っているのである。『坐り心地の良い［汝］を神々のために』と［唱えるとき］は「安楽に坐れる［汝］を神々のために」ということをこのように言っているのである。

1.3.4.12　その［プラスタラ］を押しつける—『ヴァス，ルドラ，アーディティヤたちが汝の上に坐るべし！』(VS. 2.5) と［唱えて］。実に，ヴァス，ルドラ，アーディティヤなるものは３つ一組の神々である。彼らが汝の上に坐るということを彼はこのように言ったのである。［プラスタラを］左手によって押しつけながら，（後続）

1.3.4.13　次に右手によってジュフー杓をつかむ—『魔物である羅刹らがこの場所に入り来ることなかれ！』と［唱えて］。なぜならば，ブラーフマナは羅刹らの撃退者であるから。それゆえに［プラスタラを］左手によって押しつけながら，（後続）

1.3.4.14　次にジュフー杓をつかむ—『汝はグリタ[44]を好むものなり。名前からしてジュフー（舌）と言えり』(VS. 2.6) と［唱えて］。なぜならば［ジュフー杓は］グリタを好み，名前からしてジュフーであるから。［続けて唱える—］『好みのダーマンとともに[45]好みの座席に坐るべし！』（ibid.）と。『汝はグリタを好むものなり。名前からしてウパブリト（保持者）と言えり』と［唱えて］ウパブリト杓を［つかむ］。［続けて唱える—］『好みのダーマンとともに好みの座席に坐るべし！』と。『汝はグ

リタを好むものなり。名前からしてドルヴァー（保持者）と言えり』と［唱えて］ドルヴァー杓を［つかむ］。なぜならば［ドルヴァー杓は］グリタを好み，名前からしてドルヴァー（保持者）であるから。『好みのダーマンとともに好みの座席に坐るべし！』と［唱えながら］その他の焼供を［つかむ］。

1. 3. 4. 15　実に彼はジュフー杓を［プラスタラの[46]］上に置き，［プラスタラの］下に[47]その他の柄杓を［置く］。実にジュフー杓はクシャトラであり，その他の柄杓はヴィシュである。このようにまさにクシャトラをヴィシュの上に載せるのである。それゆえ，これらの人民は高い地位に居座るクシャトリヤに下から仕えるのである[48]。それゆえ上にジュフーを置き，下にその他の柄杓を［置く］のである。

1. 3. 4. 16　彼は［焼供に］触る―『堅固なるものらは坐れり』（VS. 2. 6）と［唱えて］。なぜならば，堅固なものたちが坐ったから。［続けて唱える―］『天則の母胎に』と。実に祈献は天則の母胎である。なぜならば，祈献において［天則が］坐るから。［続けて唱える―］『ヴィシュヌよ，彼らを守護すべし！　祈献を守護すべし！　祈献主を守護すべし！』と。ゆえに彼は祈献主に言及する―『われを守護すべし，祈献を導くものよ！』と。ゆえに自らを祈献から締め出すことはないのである。実にヴィシュヌは祈献である。ゆえにこのようにまさに祈献に対し守護するために全て（sg.）を与えるのである。それゆえ唱える―『ヴィシュヌよ，彼らを守護すべし！』と。

注

(1)　「Śatapatha-Brāhmaṇa訳注（1. 1）」（『大正大学大学院研究論集』21号，1997所収），「同（1. 2. 1-4）」（『大正大学大学院研究論集』22号，1998所収），「同（1. 2. 5-3. 1）」（『大正大学綜合佛教研究所年報』24号，2002所収）

(2)　辻直四郎編『ヴェーダ・アヴェスター』，筑摩書房，1967，pp. 141-2.

(3)　これはvediが人間の大きさに作られ，そこに祈献物（yajña-）が展開されるということに言及していると思われる．

(4) この２つの柄杓は人間の両腕である，ということを意図しているのか（？）.

(5) sruva杓によってājyaがdhruvā杓, juhū杓, upabhṛt杓に移されるという行作に言及している.

(6) ここでは３種の柄杓が同等のものとして述べられている．現在に伝わるPavitreṣṭiにおいてもこれら３種の柄杓はほぼ同形である．Cf. Tachikawa et al., *Indian Fire Ritual*, p. 42.

(7) 例えば，VS. 1. 10b : agnáye júṣṭaṃ gṛhṇāmi.『アグニのために好ましい汝をとらん！』.

(8) ájāmitāyai. jāmí-は，同じGotraに属する親類を指し，（近親婚を避けるために）その中での結婚は禁じられている．Brāhmaṇaの意義解釈（arthavāda-）においては，似たような行作が反復されることを禁止する際にこの語が用いられる．Aitareya-Br. 3. 47「『実に同日に同じ讃歌を祈献するならば，実に祈献において近似（jāmi-）が作られる』と言う者もいる．しかし……」. Cf. B. K. Smith, *Reflections on Resemblance, Ritual, and Religion*, 1989, pp. 51-53; H. Krick, *Das Ritual der Feuergründung*, p. 544, n. 1476を参照.

(9) 「食べる者（attṛ/annāda-）」と「食べらるべき者／食物（ādya-/anna-/annādya-）」という定式化は，ŚB. における意義説明（arthavāda-）の中でしばしば用いられている．Cf. 土山泰弘「新満月祭と月」(『宗教研究』262, 1985, pp. 287-306), p. 293; W. Rau, *Staat und Gesellschaft im alten Indien*, p. 34f.

(10) samṛddha-.「栄養／活力に満ちている」とも訳しうる．Cf. 徳永宗雄「同語反復表現におけるインド的思惟の特質」(『哲学研究』, 557号, 1991, pp. 429-467), p. 452.

(11) prâva√sā-（ŚB. の用例はここのみ）. PW. s. v. „den Wohnsitz nehmen unter (acc.)“ でも意味は通じるが，ava√sā-の項の5）„(stehen bleiben bei Etwas) sich entscheiden für, bestimmen, namentlich einen Ort, Opfer-, oder Wohnplatz“ という意味に採ったほうが良さそうである.

(12) tvatの用法に関してはDelbrück, AiS, § 18; Minard, *La subordination*, p. 103を参照.

(13) Cf. Sāyaṇa註：‘imāḥ’ sarvāḥ prajāḥ rājñaḥ akāśāt ‘pṛthak’ svatantrā eva bhveyuḥ.「imāḥ即ち全ての人民は王から離れて，pṛthak即ち自治を行うものとなるであろう」.

(14) kṣatríyasyaivá váśe satí. このLocative Absolutiveの解釈については Oertel, *Syntax of Cases*, p. 175および*Minard, Trois énigmes*, II, §603を参照（Eggelingの訳を正している）.

(15) ápi yát te paró níhitaṃ tád áhara. paróに関しては，Sāyaṇa註：‘paraḥ’ parastād anyatra gopyasthāne「paraḥ＝遠くにある別の隠し場所に」に従って訳した．

(16) Anuṣṭubhは音声／発言（vā́c-）である，という定式化はヴェーダ文献にしばしば現れる．√stubh-「歓声をあげる」という語根を意識した定式化か（？）．Cf. S. S. Dange, *Speech in Vedic Ritual*, Delhi, 1996, pp. 75-81.

(17) Griffithはここのdhā́man-を‘station’と訳し，Eggelingは‘resort (or, dainty)’と訳す．dhā́man-の研究はJ. Gondaによるもの（*The meaning of the Sanskrit Term Dhāman-*, Leiden, 1967）が最も詳しいが，現時点ではそこに挙げられたdhā́man-の用例を批判的に研究することが適わなかったので，意味の確定に関しては保留とさせていただく．

(18) この３回とは，1. 3. 2. 8以下に説かれた，juhū杓に４回，upabhṛt杓に８回，dhruvā杓に４回とる行作について指すものと思われる．３回で「(行為の）完了」に至るという観念は，ヴェーダに限らず，古代インド文学の広い範囲にみられる．Cf. 原實「三度び」(『仏教教理の研究：田村芳朗博士還暦記念論文集』, pp. 527-543所収）esp. p. 531.

(19) Cf. Uvaṭa註（ad VS.）「āはもう一つの意味で用いられている．āhavanīyaの別名としてのkhara-即ち『kha-即ち天を，rāti即ち与えるもの』の上に立っている，というのがākhareṣṭha-である」．この解釈に従えば，khára-は確かに「(献供の容器を置く）四角形の盛土」という意味で用いられている（ŚB. 5. 1. 2. 15）ので，「カラ（khára-：盛土）に置かれた」という意味がかけられていることになる．

(20) prastará-. darbha草の束を指す祭祀用語で，字義上は「撒くもの」．Cf. J. Gonda, *The Ritual Functions and Significance of Grasses in the Religion of the Veda*, 1985, Amsterdam, pp. 197-216.

(21) 頭頂付近に剃り残した髪を指す用語と推測されるが，詳細は不明．ブラーフマニズムにおける髪の問題については，阪本（後藤）純子「髪と鬚」(『日本佛教学会年報』, 第59号，1994, pp. 77-90）を参照．

(22) Sāyaṇa註は‘prakḷptam’ prakarṣeṇa kḷptaṃ daśamāsasaṃpūrṇāvayavam apatyaṃ「prakḷptaṃ＝『みごとに生まれた』，即ち10ヶ月で体肢が完成した赤児を」と解するが，後藤敏文氏（“Purūravas und Urvasī” aus dem Vādhūla-Anvākhyāna, in *Anusantatyai*, pp. 79-110, p. 85, n. 19）によれば，vijā́yate「お産をする」は自動詞として用いられるので，ここではEggeling訳‘without difficulity’ならびにJ. Gonda訳‘easily’（J. Gonda, *ibid*, p. 199）に従って訳した．「母親や胎児に支障が生じることなく」程度の意味と推測される．

(23) Cf. Sāyaṇa註：íti śabdo hetau. yasmād evaṃ tasmād ity arthaḥ「ítiは理由を意味する語である．『このような理由で』という意味である」．

(24) Sāyaṇa註：upari-vāsasā に従って補った．

(25) śuśruvā́ṃso 'nūcānā́s. Eggelingは 'who have studied and teach revealed lore' と訳すが，語根の意味（√śru-「聞く」，anu√vac-「復唱する，学習する，暗唱する」）からして不適である．この２つのperfect participleで「三つ一組の明智（trayī vidyā-）」を学習し終わったことを述べている．Cf. 伏見誠「Bhṛguの他界体験物語」（『インド思想史研究９』，pp. 61-77），p. 68，n. 46．またŚBK.では，brāhmaṇā́ḥの前にmanuṣyadevā́ḥ「人間の中の神（＝神の領域に至った人間）である」という語が付加されている．

(26) havyá-．字義は「（火の中に）注がるべきもの」で，「火の中に注がれる供物」を指す．

(27) 1. 2. 3. 1で述べられた，逃亡した３人のアグニを指す．祭官としてのアグニの選任＞逃亡＞発見というモチーフは既にṚgvedaから用いられている．

(28) vaṣaṭ-kāra-．Macdonell, *Vedic Grammar*, p. 34によれば，vaṣaṭは√vah-「運ぶ」から派生したvakṣat（3, sg. s-aor. subj.）「運びたまえ」の異形であり，tの代りにṭが用いられているのは，vāṭ, vaṭ（3, sg. aor.）からの類推とされる．śrauṣaṭ（<*śro-ṣ-at 3, sg. s-aor. subj.）「聞きたまえ」も同様に説明される．Agniは供物（yajñá-, havyá-, havís-）の運び手である，という思想がVeda祭式の根底にあるので，Agniに対する掛け声と考えられる．また，vaṣaṭ-kāra-がvajra-であるという表現はVeda文献に何度か見られるが，Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa 8. 1. 1. 2では，「神の矢（deveṣu-）」とも称される．Cf. Dange, ibid., pp. 146-163.

(29) pra√vṛj-は，祭祀の文脈で「祭火にのせる，焼く」という意味で用いられるから，EggelingやBodewitz（*The Jyotiṣṭoma Ritual*, p. 68; p. 241, n. 11）のように 'to strike down' という意味に採る必要はなかろう．Cf. JB. 1. 120：na bṛhatyā vaṣaṭkuryāt paśūnām apravargāya. yad bṛhatyā vaṣaṭkuryād vajreṇa vaṣaṭkāreṇa paśūn pravṛñjyāt.「家畜たちを焼くことのないように，ブリハティーとともにヴァシャットという掛け声をなしてはならない．ブリハティーとともにヴァシャットという掛け声をなすならば，雷であるヴァシャットという掛け声によって家畜たちを焼くであろう」．

(30) svā́hāの語源に関しては諸説ある．語根に関してすら諸学者の見解は一致しない：√ah-（Suryakanta, Ved. Dic.），√dhā-（Renou），√hu-（Sāyaṇa, Dange）．

(31) Sāyaṇaは，yasya~ tasyaを「祈献主（yajamāna-）」を指すものと解してい

るが，前文から考えて，これには従えない．

(32) palāśa-．学名*Butea frondosa*（ハナモツヤクノキ，花没薬樹）．Cf. 西岡直樹『インド花綴り』，木犀社，pp. 46-49；マジュプリア著，西岡訳『ネパール・インドの聖なる植物』，八坂書房，pp. 129-134. Veda文献において，palāśa-/parṇa-はbrahmaṇ-/brāhmaṇa-と結びつけられ，特権的地位を占めることに関しては，B. K. Smith, *Classifying the Universe : The Ancient Indian Varṇa System and the Origins of Caste*, New York, 1994, pp. 217-221を参照．

(33) vikaṅkata-．学名*Flacourtia sepiaria*（インドルカム）．Cf. 西岡直樹，前掲書，pp. 201-203.

(34) kārṣmarya-．学名*Gmelina arborea*.

(35) bilva-．学名*Aegle marmelos*（ベルノキ）．Cf. 西岡直樹，前掲書，pp. 24-26；マジュプリア，前掲書，pp. 100-109.

(36) khadira-．学名*Acacia catechu*（アセンヤクノキ）．

(37) udumbara-．学名*Ficus glomerata*（ウドンゲノキ）．Cf. 西岡直樹『続・インド花綴り』（木犀社），pp. 25-28；マジュプリア，前掲書，pp. 186-188.

(38) téjas-の意味と用法に関しては：Cf. J. Gonda, *Some Observations on the Relations between "Gods" and "Powers" in the Veda*, 1957, p. 58ff.

(39) Gandharvaに関する最近の研究として，O. H. De A. Wijisekera, Vedic Gandharva and Pāli Gandhabba, in *Buddhist and Vedic Studies*, pp. 175-212, Delhi, 1994; A. Wayman, *The Vedic Gandharva and Rebirth Theory*, Pune, 1997がある．また，viśvāvasu-「あらゆる富をもたらす」という語に対応するAvesta語にvīspā. vohuという表現があるので，この表現自体はかなり古いものと推測される（但し，Yasna 37. 4 ではaṣa-「天則」に対する限定辞として用いられている．Cf. H. Humbach, *The Gaṭhās of Zarathushtra and the Other Old Avestan Texts*, Heidelberg, 1991, pt. 1, p. 146)．因みに，viśvavasu-でなくviśvāvasu-と長音化されていることについては：Cf. K. Hoffmann, *Aufsätze zur Indoiranistik*, II, p. 598, n. 13.；EWA, s. v. vasu-.

(40) dhruvéṇa dhármaṇāに関しては，Gonda, *The Dual Deities in the Religion of the Veda*, p. 189, 'unmovable hold or support' に従って訳した．EggelingならびにKeith (ad TS. 1. 1. 11. l) 訳 'with firm law' には従わない．

(41) 即ち，ブラーフマナの著者は，目に見えない（parókṣa-）祭火と目に見える

(pratyákṣa-) 祭火の２種類を区別している．囲い木に点火した祭火は目に見えないが儀礼上は実在する．天界の神々に供物を運ぶという祭火の役割は，目に見える世界と目に見えない世界の媒介としての祭火が，このように２種の形態をとりうるということが前提となっているように思われる．

(12) 祭火は焼べ物の運び手 (havyavā́hana-) である，という思想は，ヴェーダ祭式の根底に位置するものである．Cf. ŚB. 1.4.1.39.

(13) vasanta-．ヴェーダにおける季節区分と暦に関しては，高橋明「グリヒヤ季節祭にみられる祭祀暦」(『東洋の思想と宗教』，第１４号，1997，pp. 18-41所収) を参照．

(14) ghṛtá-．発酵バターを溶かしたものか (?)．Veda文献においてはā́jya-と同一視される場合もあるが，それらの差異は筆者には明らかでない．これらの乳製品については，西村直子「Pāli聖典における乳製品加工の定型句について」(『文化』第64巻１・２号，2000，pp. 180-159) に詳しい．

(15) もしくは「ダーマンによりて」．註(17)参照．

(16) Sāyaṇa註に従って補った．

(17) Sāyaṇa註は「プラスタラの下の敷草 (barhis-) の上に」という．

(18) tásmād upáry ā́sīnaṃ kṣatríyam adhástāt imā́ḥ prajā́ úpāsate. upa √ās-の解釈については諸説ある (e.g. Chāndogya-Up. 3.14) が，ここではChUp. のような宗教的な意味ではなく，より一般的な意味で用いられていると思われるので，Eggeling訳‘serve’に従って訳した．